

11日、大水族館の見学。イルカ群の矢のようにめぐり泳ぐ大水槽など自然の生態が面白くながめられる。海洋研究所内の見学。近代的な第一級の施設だ。寒いので手織りエリ巻や帽子を買う。

12日は早朝より見学旅行を特別バスで、まぜベルゲン大学（モスビー教授海洋物理）から海運王クリスチャンゼン研究所で塩分自記器などみてハダガンガーの生物研究所へ。ソルストランドホテルでラルフセン所長の招宴。入江の海の静かで美しい景色や、数百年前建てられた東洋風の禅寺みたいな教会堂、1万年前の古ノルウェー人の住居跡のタラ、エビ、カキを食べていた所など訪ね、夜、所長邸のカクテルパーティーに皆で大いに語り飲む。

13日、会議は水産海洋学の定義で甲論乙駁。町で古物売店の老婦夫の店をのぞくと釣針一式があった。子供はどこでも人なつこくかわいい。親切に道案内してくれた。

14日、会議も最終で、午後は所長の案内で博物館を見、国立美術館から空港へ。夕陽に暮れ行く氷河の眺めを眼下にオスロー着。

15日朝大学で鯨博士のルード学長、ヨンスゴルト教授に会ってから国立博物館をのぞき、ハンブルグへ飛ぶ。ドイツのヘンベル博士（ニシン）と同席したので迎いの奥さんの車でホテルへ。夫人はラケットかかえてテニスコートに行った。夜は魚の食堂へ。

9月16日（日）、アルトナの海洋漁業博物館はなかなかよかった。海運博物館、国立美術館と歴訪してくたびれ、公園でかいビスマルク銅像を仰ぎながら休息。「ビスマルクは戦犯じゃない」とがんばって占領軍のとりわけ命令に従わなかったドイツ国民の背骨と信念に敬意。夜アムステルダム着。タクシーにボラレ、チップ強要されて北欧、ドイツとちがった印象をうける。ここから仏、伊並か？

17日、当地も住宅難らしいと遊覧ボートで運河を巡航して感じた。国立美術館、海事博物館をたづねる。老船長が守衛で、昔の華やかな時代の写真をみせ、手紙と切手を頼まれ

る。ロイテル提督の栄光を誇りとする古い陳列だった。

18日、ブラッセルからアントワープへ。秋雨の海時博物館は中世紀の城のような建築でハンザ同盟の夢の跡、夜また魚食堂へ。

19日、ブラッセル。王宮前の魚料理の店で舌ビラメとワインはじつに美味だったが値もよかった。ここでもチップ、チップ。パリと同じだ。夕方パリ着。車の雑沓は東京と変らぬ。デュクスネホテルに落ちつくと隣室は旧知のパーソン博士（ユネスコ）で、さっそく街で乾盃する。しゃれてあかぬけたパリ。

20日（木）、朝から第二回政府間海洋学会議がユネスコ本部で始まった。日本代表として戸田盛徳、寺田一彦氏と出席。夜ウースター海洋学事務局長招宴パーティー。終わってモンマルトル散歩。メトロは安くて便利だ。

22日（土）、水産海洋分科会、インド洋調査分科会などへ出る。うまいバスク魚料理を味ってセーヌ河畔を散歩。夜景がよい。黒い粋なマントのおまわりさんが一丁おきにコッソリ歩いて街の治安を守ってくれている。

23日（日）、ユネスコの竹内能忠博士の車でドライブ。ヴェルサイユ王宮見物、演劇博物館、トリアノン離宮など。「階前梧桐すでに黄葉」という詩を連想した。松林の内の芝生で夫人心づくしのお弁当。美の女神像にみとれて眼鏡を紛失。夜、竹内家で晩餐を戴く。日本食のストックを食べつぶしたとはすまない話。

24日、ひる外国代表連と豪華な食事をしたが、変な木蓮で花萼か竹の子みたいなものを食った食あたりか夜半、病人のようになって、夕食に日本代表団せっかくの魚介料理も手が出ぬ。

25日、大使館リッツホテルのパーティー。大平外相あり。

26日、再遊でパリの街に親しみをおぼえた。本やベレー帽、土産など買う。

27日、米大使館招宴で水産局長マッカーナン博士らと懇談。

28日、議事録整理を終わって深夜、戸田代

表らと食事。

29日、報告をまとめ終わってセーナ河畔を散歩。古本や絵などを少し買いルーブル美術館をのぞいてノートルダムへ。モンマルトルで魚料理。

9月30日(日)、ブルジュ飛行場へ、10時発ロンドン経由、悪天候でアイルランドのシャノンに廻り給油、おかげで免税の皮財布など少し買った。大西洋横断、午後4時カナダのハリファックス着。空から見たノバスコチアの紅葉の燃えるような美しさはまったく感動的であった。霧の揺曳する氷蝕の岩原に織り成したこの自然の美しさ。この税関はノロイ。しかしエジプトや日本にくらべればマンだ。上野福三博士(三重大)、平田八郎博士(北大)に迎えていただいてノバスコチアホテルに。丘上の五稜閣に登臨、北辺漁業要港の当地を認識した。

10月1日は、古い落ちついたダルホージー大学動物学部でヘイス教授に会う。高い書棚へよじのぼり、老先生が別刷を下さる。ベドフォードに新設の海洋研究所は所長イングリッシュ博士の案内で見学。広大で立派だ。海に取組むカナダ政府の意気込は壮大である。午後発モンリオールを經由、夜ねぼけてエドモントンで下りようとして「此処はちがいます」と連れもどされる大失敗をやらす。バンクーバーに深夜着。空港ホテルで泊る。

10月2日、早朝は霧が重くとざす。今年はずいぶん早いそうだ。夏時間を修正し、ヴィクトリア経由、9時チャトル着。W大学の海洋学部長フレミング教授に迎えられ、レイクワイルダネスという箱根の芦の湖みたいな氷蝕湖畔の第8回太平洋マクロ会議および東太平洋会議(EPOC)に出席。朝9時から夜10時までいくつかのグループに分れて討論を重ね、三食を共にしながらの数日間で、みな親密になる。

10月3日、早朝の静寂に鴨や白鳥、野鳥の天地の池をうかがう。秋霧のおりた池は神秘的だ。EPOCはこの日からで表面水温観測、調査船、定点洋上観測船、無電通報、BT

報告など分科会も夕食後にあり大変な勉強ぶりである。

10月5日正午閉会、フレミングとワシントン大学海洋研究所へ行ってバーンズ教授にコロンビア川ダム原子力汚濁問題調査の話を書き、夜フレミング家の客となる。パーティー、大学海洋研究所の連中に学士院のライマン博士らも集まる。パーティーは婦人教養を高めるのにとくに役立っている。

6日(土)は朝寝。午後フレミングとフットボール試合見物に出かけた。6、7万人もの大観衆で埋められた大学スタジアムで人々の熱狂ぶりはすごい。日本の国技館の大相撲に似ている。ワシントン大学がカンサス大学に勝つ。余興がまるでレビューみたいで面白い。女子生がおどりをみせたり、トンボがえりしてみせたり、応援団は人文字を色ブラカードでえがき出す。ハスキーダッグとか乗物の発達年代史の表現など、けっこうみなを楽しませる。

夜は「20世紀未来の世界大博覧会」見物にフレミング夫妻に母堂と出かけた。光の噴泉設計は日本人建築技師の手になるもので大評判であった。原子力など最新科学技術の展示もあかぬけして面白かった。

10月7日、ローカル線でオレゴン行きの飛行機に乗る。雲行きがおかしいなと思ったが、はたして途中大ジケになり、散々揺れて同乗者はみな酔っぱらう始末。アストリアの着陸はとうとうできずポートランドへ。コルバリス空港でも風速17メートル(秒速)というシケだったが、オレゴン大学海洋学部長バート博士の親切な出迎えで昼餐をお宅で家族といっただいた。田園牧歌的で静かな大学町だ。

8日、9日と講演2日ののちチャトルにひきかえして、夕方帰日の飛行機に搭乗。

11日の早朝、無事帰りついた。

忙しい旅だったが、充実したスケジュールどおりに飛びまわり、収穫はいっぱいで楽しい思い出の数々を残した。

(筆者：東京水産大学教授・理博)

綿
は後
ぶん
もい
う
とに
紡糸
われ
あっ
年ご
して
った
中
随分
った
から
綿
の時
子に
の記
糸、
この
日
一
の手
め輪
製造
代将
た。
がい